

## 〈書評〉

関民子著

## 『只野真葛』（人物叢書）

（吉川弘文館 2008年 283頁 ISBN 978-4-642-06248-1 2,000円＋税）

柳谷 慶子



只野真葛は、江戸時代に稀有の女性思想家として、女性史研究において特筆されてきた人物の一人である。只野の姓は、後妻として入った仙台藩士の夫の家の名であり、真葛というのは、彼女が書き残した作品に用いた筆名である。真葛の執筆活動は、63年の生涯の晩年にあたる49歳から本格的に開始されていた。その著作のなかでも、文化14年（1817）55歳の年に書きあげられ、出版を期待して文政2年（1819）に戯作者滝沢馬琴のもとに送り届けられた『独考』は、経世済民を問い、国体論、女性論に及ぶ独自の思惟を展開し社会や時代の思想に鋭い批判の目を向けた作品として、異彩を放っている。真葛はこの『独考』の執筆により、思索の独創性のみならず、生涯の履歴に大きな関心が寄せられてきた。戦前の中山栄子にはじまる女性史の観点からの真葛研究は、戦後柴桂子氏に受け継がれ、1970年代以降、本書の著者である関民子氏をはじめ、鈴木よね子、本田和子、大口勇次郎、門玲子ら各氏により成果が積み上げられている。とりわけ関民子氏の研究は、大学院時代から現在に至るまで、30年以上に及んでおり、真葛の再評価をおこない、その思想に高い意義を見出した研究論文は、『江戸後期の女性たち』（1980年、亜紀書房）に結実している。本書『只野真葛』は、研究者生活のスタート以来、只野真葛と真摯に対峙しながら、近世女性史研究を牽引してこられた、関民子氏による、待望の評伝である。まずは本書の刊行を心から喜び、著者の関民子氏に敬意を表したい。

本書の全体は、真葛の父方、母方双方の系譜を紐解くことから始まり（第一章）、生家の工藤家の家族の生活（第二章）、娘時代の奥勤め（第三章）、工藤家の転変と奥女中の辞職（第四章）、結婚・離婚と再婚（第五・六・七章）、晩年の執筆活動と滝沢馬琴との交流（第八・九・十章）へと、真葛の生涯をその人脈のひろがりに着目しながら、ほぼ編年で叙述するスタイルが採られている。真葛のライフステージを明らかにすることは、真葛独自の思想の形成過程を探る取り組みでもある。先行研究がそうした観点から、真葛の成長過程に着目し、なかでも生家工藤家の文化サロンの家環境や、父工藤平助との父子関係を特別なものとしてクローズアップしてきた成果に拠りながら、本書は、さらに著作や関係史料を綿密に読み込み、真葛の生涯に影響を与えた人物、体験、事件を掘り下げることで、真葛の思想心情を内在的に理解するための手がかりを豊かに描き出している。本書の研究史上の最大の意義をここに見出せよう。

離婚後に戻った工藤家で、父平助との新たな関係が生まれていたこと、再婚した仙台の只野家での生活は、夫と先妻の子供だけでなく、城下きっての文化人との交流に恵まれ、只野家の一員としての時の流れは家の外にも確実な人間関係を築いていたこと、滝沢馬琴とは『独考』を徹底的に批判されながら真葛の名が後世に伝えられるという、屈折した関係が続いたことなど、ライフステージの随所に新たな事実が掘り起こされていることも、評伝として読み応えがある。

一方、第九章では、『独考』の章タイトルの通り、同書の思想構造の解明がなされている。関氏は既に前著において、真葛の思想に「勝負」の論理を見出し、これを積極的に評価することで、真葛を幕

藩制解体期における「女性解放の先駆者」として位置づけている。本書では、さらにこの理解を展開させ、真葛の「勝負」の論理の両義性に説き及んでいる。すなわち、真葛は武士の立場から、「勝負」の論理により、「心の乱世」にある社会の危機を克服する体制再編の方法を考えていたが、結果的にそれは、武士の支配する体制を解体させる方向に転化していることを指摘する。「勝負」の論理の両義性は、女性論にも及び、真葛はいったん女の従属性を承認しながらも、男性が「あまりに過酷な抑圧を女性に強いるならば、「無学む法」なる女といえども、それに異議申し立てをする権利をもっている」とみていた。これは「勝負」の論理を媒介として、いわば女の「服従の論理」を「抵抗の論理」に転化したものであると解釈する。このように思想の両義性を明らかにした関氏の理解は、真葛独特の思想構造をとらえるうえで、魅力的である。

ここでは、真葛の思想の萌芽と関わって考察されている問題のうち、ふたつの点を取り上げたい。ひとつは、家をめぐる考察である。関氏は冒頭、真葛が13歳であった安永4年(1775)に刊行された江戸切絵図を提示しながら、生家工藤家の環境が後に人間と社会をとらえる上で大きな影響を与えたことを指摘する。真葛が少女時代を過ごした江戸築地の工藤家の周辺には、幕府奥医師で蘭方医の桂川甫周の家、歌人で国学者の荷田蒼生子が一時寄寓していた旗本大島織部家、松平康福の屋敷、仙台藩蔵屋敷、また前野良沢の住む中津藩邸などが見出せる。この地にあって父の工藤平助は、藩医として勤める仙台藩の役人ばかりでなく、蘭学者、長崎のオランダ通詞、国学者とも交流を重ねる時期を過ごし、さらに身分や職業を隔てることなく多彩な人々と交際があった。真葛は父の傍らで、当代きっての知識人をはじめ、大名から役者・博徒にいたる多くの人々を見ながら少女時代を過ごしていたのであり、外の世界を情報として知るだけでなく、父に連れられて江戸城二の丸や大名家の奥に出かけ、外の世界を直接観察する機会があったことを明らかにしている。

関氏は、真葛の家環境を血筋の側面からも注目する。『むかしばなし』をはじめ著作のなかで、真葛は自身の存在を家の血筋に位置づける試みをしている。とりわけ父の家である工藤家に対する思いの強さが真葛の自意識を支える特長のひとつであることは、従来言及されてきたことである。本書第一章では、父の養家である工藤家、母の生家である桑原家、そして父の実家である長井家の由緒を探り、それぞれの祖父母の人生をたどるなかで、真葛の家族も親族もみな、すぐれた才能に恵まれたばかりでなく、それを伸ばすために人一倍の努力を重ねた人々でもあったことに目を向けている。16歳で奥勤め上がったさい、文字の読めなかった工藤家の祖母ゑんは、同僚から嘲笑された悔しさから深夜一人で手習いを始め、1年で上達した経験により、「人というものは、ならぬとて捨てぬものぞ」と教え、真葛の脳裏に刻まれていた。一方、母方の祖母である桑原やよ子は、縫物や髪結など「女のわざ」に優れていただけでなく、古典に堪能で、『宇都保物語』の研究に先鞭をつけた研究者として、国文学ではその存在が高く評価されてきた人物である。癩癩持ちではあったが、後に仏教の悟りを開いてからは、世の中は我にあわぬものと得心して生きた人であり、真葛はこの祖母の姿をみながら、自分も悟りを開けなはずはないと考えるようになる。十代半ば以降の真葛に生き方の一つの指針を示した人物として、やよ子の存在をとりわけ重視する。真葛の父母の夫婦としての関係も、注目すべき姿としてとらえている。多才で野心家であった父平助と対比的に、母は物静かで思いやりの深い女性ではあったが、みずからの教養に関わることには意見もち、主張する人であった。父母は互いの教養に関することには自由に意見をいいあえる関係にあったことを探り出している。

真葛は後年、生家の工藤家ででの生活をも、女性の社会的な自由を抑圧する、籠の中の「かい鳥」的状

況と変わりのないものであると自覚するに至る。しかし、家制度に考えを巡らす真葛の批判的精神の根底に、真葛の才智を磨かせた家と家族の存在があることを、関氏は説得的に描き出している。

ふたつめに、奥女中としてのライフステージも、真葛の思想形成に色濃く影響した社会経験として明確に位置づけられている。真葛の奥奉公は16歳で仙台藩の江戸上屋敷に上って以来、26歳まで10年に及んでいた。武家の娘にとって、奥奉公は許される唯一の職業体験であり、社会体験でもあったが、従来、真葛の奥奉公については、その経緯に注目した言及にとどまり、10年に及ぶ経験が真葛をどのように成長させ、その後の人生や思想形成にいかなる影響を与えた体験であったのか、具体的な検討はなされてこなかった。これは職務上の見聞を他言することを許されない奥奉公の決まりに従ってか、真葛がこの間の日々をほとんど記録に残していないという事情にも困っている。関氏は、真葛が『むかしばなし』に書き残したわずかな感想を手掛かりに、近年の仙台藩の奥向についての研究成果、および真葛が後年、奥女中の生活の経験をふまえて書いたと類推される「宮仕えの女の心得」に検討を加えることにより、次の諸点を指摘している。第一に、真葛は奥の組織にあって、周囲に影響されずにみずから責任ある職務を遂行するという「独りづとめ」の覚悟を決めた。それは女の手本となることを志していた、少女時代の目標を追求する行動として意識されたものでもあった。第二に、町家の女性と同僚として接する日々のなかで、武士の支配を揺るがしかねない町人の敵意と、「智」の不足する武士の姿を知ることになる。この身分間の対立の発見は、真葛の心に深く沈潜する問題となった。第三に、奥勤めを通して真葛は、男女の間にも様々な出来事が起こることを教えられていた。このように、真葛にとって奥勤めの経験は、工藤家での子ども時代には考え及ぶことのなかった社会の現実を目を開かせていたのであり、さらに『独考』の思索に結実する、近世後期の身分秩序の揺らぎをとらえる視点を芽生えさせたことになる。

以上、本書は、真葛の60余年の年輪に刻まれた人生観照こそが、新たな思想を生み出していたことを明確に論じている。幕政史・藩政史、政治思想史の成果も盛り込んで叙述されている本書は、真葛研究、女性史研究のみならず、近世史研究に多くの示唆を与える著作でもある。

(やなぎや・けいこ／聖和学園短期大学教授)